新制作

会報 No.44
発行
2002年12月20日
編集・発行人
松浦安弘

発行　新制作協会　〒110-0013 東京都台東区入谷2-4-2 増田ビル202　Tel.03-5603-8350　http://www.shinseisaku.jp

2002年第66回新制作展

第66回 新制作展

新会員・受賞者紹介

新会員

絵画部

尾松（おまつ） 直（ただし）

◆新会員に推挙して頂きありがとうございました。マイペースで、オンリーワンの作品をと、初入選以来出品してきました。これからも新しい自分をみつけるための制作を続けていきます。

◆一九三〇年兵庫県生まれ。一九六一年第24回新制作展初入選。第37回新制作展新作家賞受賞。

加藤（かとう） 聡（さとし）

◆会員にしていただきましてありがとうございました。うれしさで胸がいっぱいと同時に身の引き締まる思いです。これまで多くの方々が、いろいろなことを親切に教えて下さいました。新制作の会場に足を運べば、必ず収穫ありの繰り返しでした。これからもがんばって制作し、会のために少しでも役に立てればと思います。どうぞよろしくご指導下さい。

◆一九五一年愛知県生まれ。一九七八年武蔵野美術短大卒業。一九八七年第51回新制作展初入選。第64回、65回新制作展新作家賞受賞。

藤田（ふじた） 邦統（くにつぐ）

◆誰から学ぶかということが問題なのだ。私はとても恵まれている。根っこの方のことを学ぶことが出来る。新制作に出品し続けてよかった。会員になったことは一つの区切りとしてうれしい。これからも、やればやるほどわからなさ、不思議さを増していくのだろうが、勇気を持ってとにかく進もうと思う。今後ともよろしくお願いいたします。

◆一九六四年福島県生まれ。一九八七年和光大学専攻科芸術学専攻修了。一九八六年第50回新制作展初入選。第56回、63回新制作展新作家賞受賞。

彫刻部

西川（にしかわ） 淑雄（よしお）

◆会員に推挙いただきありがとうございました。これからも変らず制作を続けていくと思います。もっともっと自分と向き合わなければいけなくなると思っています。後三十年この世にいられると思えば、二十年は確実に今までどおりに頑張れると思っています。体力の続く限りは。その後のことはその時にまた考えようと思っています。今は、彫刻を続けて生きていけることを祈ってやみません。

◆一九五〇年大分県生まれ。一九八〇年東京造形大学彫刻科研究生修了。一九七八年第42回新制作展初入選。第52回、62回新制作展新作家賞受賞。

菱田（ひしだ） 波（なみ）

◆このたび新制作協会の新会員になり、とてもうれしく思っています。十数年前、初めて新制作協会に出品したときの気持ちを忘れずに、これからも制作をしていきたいと思います。今後は自分の作品に責任を持てるものを作っていきたいと考えています。

◆一九六五年東京都生まれ。一九九一年東京造形大学研究生修了。一九九一年第55回新制作展初入選。第55回、64回、65回新制作展新作家賞受賞。

吉見（よしみ） 岳洋（たけひろ）

◆私は、彫刻を始めたころ、新制作展がとても好きで興味深く、作家の方々の作品に強い個性と質の高さに憧れました。その多様性の中で自己を見つめてみたいという思いで制作をしてきました。作品が地味でパッとしないので、会員の方と話をすることも少なかったように思います。姿勢は、これからも変わることなく、自己の内面が少しでも良くなるように、こそーっと深く見つめ展開していきたいと思います。

◆一九五九年熊本県生まれ。一九八五年愛知県立芸術大学大学院修了。一九八七年第51回新制作展初入選。第61回、63回、65回新制作展新作家賞受賞。

スペースデザイン部

加賀谷（かがや） 健至（たけし）

◆十五年前、北海道から出てきた何もわからない私をここまで導いて下さいました先生方、そして私を支えてくれた友人達、最後に私を応援してくれた家族に感謝します。今回、会員推挙をしていただき、うれしさと同時に、その重みを感じています。これからもおごることなく、

新制作の名に恥じぬよう日々精進していく所存です。

◆一九六三年北海道生まれ。一九八九年上越教育大学大学院修了。一九九〇年第54回新制作展初入選。第64回、65回新制作展新作家賞受賞。

新作家賞

絵画部

河村雅文(京都)　沼本秀昭(広島)
小島隆三(東京)　松木正代(神奈川)
石井礼子(神奈川)　竹内　一(東京)

彫刻部

大野　匠(高知)　川村兼章(神奈川)
瀬辺佳子(愛知)　永津　守(愛知)
野村修三(富山)　吉賀　伸(山口)

スペースデザイン部

加藤　徹(東京)　下山　肇(神奈川)

審査雑感

●絵画部審査について　佐藤泰生

今年の夏は異常とも思えるほど高温の日が続き、連日まさに炎熱地獄でした。そんな暑さにも負けず、大作と取り組んでこられた出品者ならびに会員の皆様には誠に敬意を表するしだいです。

今年もまた沢山の力作や意欲作が応募されました。

搬入点数は昨年とほぼ同数八五六点、入選点数はやや増えて二四五点でしたが、二点入選は七名と例年に比べると厳選でした。一点で受賞された方が二名と今回の受賞が少なめの感じですが、次のグループの獲得票数が十数票と受賞の過半数のグループに比べて離れすぎていました。初入選の方は三〇名で昨年と同数で、入、落の入れ替わりの厳しさは相変わらずということでしょうか。

新制作は入選も厳しいのですが、賞を受賞するのはほんとうに大変だと思います。出品者の多くは二点から三点の出品が多いという統計ですが、何枚もの大作の内容を少しずつ違えて描くのは難しいものです。それぞれの取り合わせや順番を考えたり、構図を変えたり、縦にしたり横にしたり、一五〇号や一三〇号などの大きさの変化も考えたりで苦労がしのばれます。いろいろな出品の仕方があるのでしょうが、一昔前の一〇点以上の出品はさすがに少なくなったようです。逆に毎年一点出品で勝負する人、またいつも二点で受賞をねらう実力作家などが目につくようになってきたのもひとつの傾向かもしれません。

例年と変わった作品を出すことがありますが、報われず落選する人、当たって受賞する人などいろいろです。守りながら攻めることはできません。自分のスタイルを変えることなのか、表現を煮詰めた結果なのか、いずれにしても問題意識とチャレンジ精神の現れと思います。

審査の難しさのわりに進行はいたって静かです。とにかく票数だけがすべてで、水を打ったような無言の戦いのすさまじさが感じられます。作品の良し悪しを多数決で判定する非情さを今年もまた味わいました。団体展では目立つ作品が良く思われがちですが、地味でもしっかりとした内容を持っている作品が新制作展には多く出品されています。どうしたらそれらの作品が多数の支持が得られるのか、審査の力量の問われるところです。また、ここ数年の傾向として時代の反映か暗いモノトーンの作品が増えているように思います。共感を得やすい一方で、この傾向が社会表現なのか自己を掘り下げた表現なのか、描く側も審査する側も同じ問題を担わなければなりません。

終りに、66回展の反省を含みながら、出品規定などいろいろ改善していかなくてはならない問題があるようです。少しでも出品者が充実して制作できるようにしたいと思っておりますのでご協力のほどよろしくお願いいたします。

（絵画部会員）

●彫刻部の審査にあたって　五十嵐芳三

66回展の彫刻部応募作品数は、昨年度より多くなり、一八九点で、その内入選は九一点でした。これは初出品・初入選の方達が多くなったのが原因で、今年は一九名もの新人が加わりました。

初入選の作品の中には習作的なものもありますが、自然に立ち向かう謙虚さ、表現への試み等を含みながら、高いレベルのものもあり、今後を期待し、一層の新鮮な制作を願うものであります。

ところが一八九点の内半数以上が落選という彫刻部の厳しい現実があります。数点出品されても、その内一点入選が主ですが、今年は三名の作家が二点入選を果たしました。ここ数年来の作家諸氏の創意と努力を感じました。また大作も多く例年より会場が狭くなったように思います。

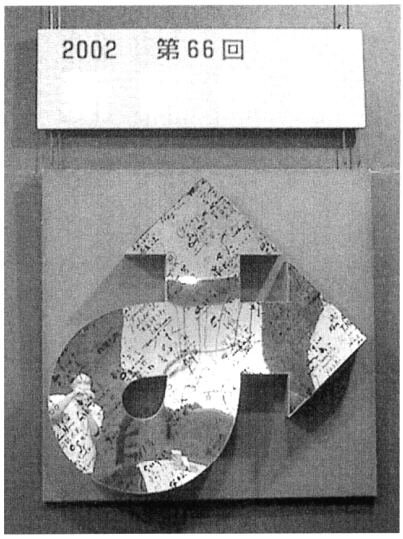
具象的な作品は描写の仕事を出発点としていかに作者の心の存在を形に表現出来ているかが焦点となるようですが、地道な研鑽が大切です。同じように抽象的な作品は、作者のイメージから出発して、彫刻の素材の扱い方や技法等それぞれの工夫によって、新しい世界が生れるもので、多種多様なものが存在します。

今年はかなり大作が多く迫力のある作品がありましたが、何といっても作者のオリジナリティが尊重される世界であります。

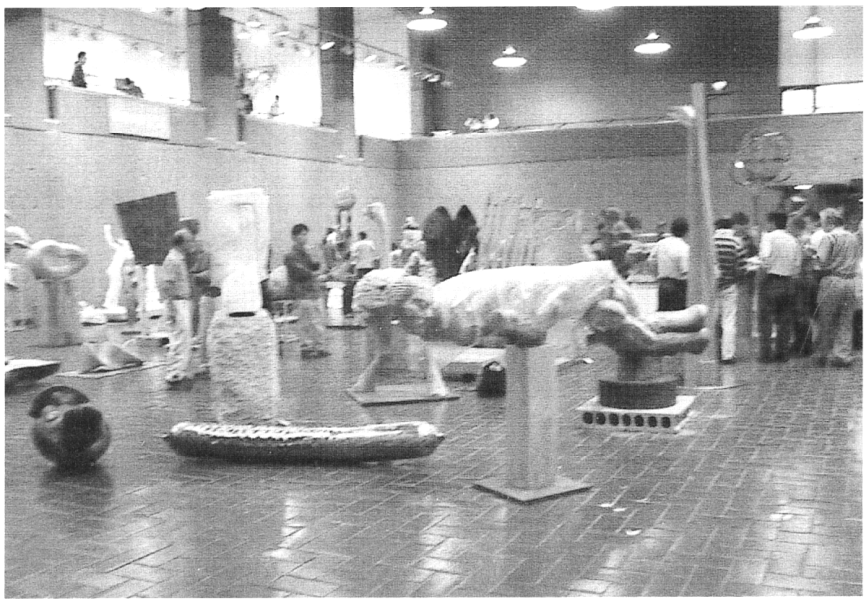
倉庫のような審査場で見るよりも、実際に会場に陳列し、会員の作品と共に鑑賞すると、新制作の彫刻は具象・抽象と多様な中にあって、それぞれに独創的な試みが感ぜられる楽しみがあります。

応募者の方々には新制作の仲間として、物まねでない自らの世界を見出しつつ、次年度に向けて頑張っていただきたいと願っております。

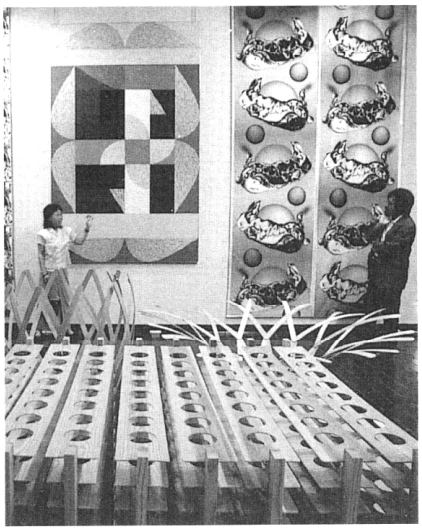
（彫刻部会員）

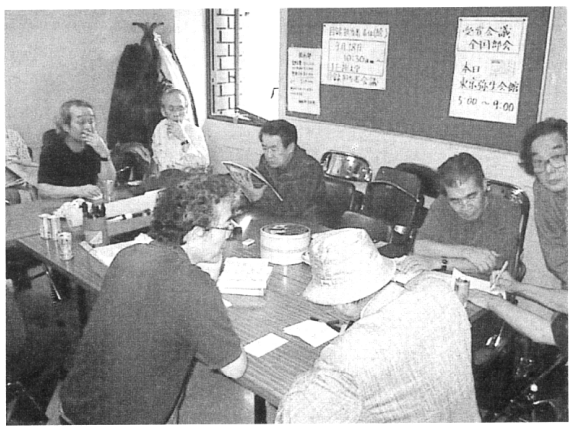


66回展点描



66回展点描





〈寄稿〉

新制作展を見て

松永　真

ある日突然新制作協会の方から電話を頂いた。会報に一筆書いてほしいという。デザイナーであるから、展覧会をみて展示などについて一言書けというわけである。お断りするタイミングも逸したまま、丁寧なお手紙を頂いてしまった。チケットも同封されていて、もう展覧会は始まっていた。第三者による忌憚のない意見が欲しいという。この忌憚のない意見というのが曲者で、私は随分これで失敗してきた。「よくぞ言ってくれた。言われなければ気付かないところであった。」と感謝されながら相手は思い切り傷ついていたりする。その後何かにつけて話題にされ、いかに相手が私を恨んでいるかが判り、唖然としたりするのである。執筆は難しい。

とにもかくにも私は久しぶりに上野に出掛けた。都美術館に着くと絵具の匂いがプーンと漂ってくる。何故かこの匂いは、遠い昔父親と出掛けた美術館の思い出と共に子供の頃の自分に戻ってしまう。しかし、あの当時、子供なりにもドキドキした荘厳さは全く無い。私はエントランスというものはかつての都美術館の中央階段ではないけれどドキドキしたいと思う。とにかく作品と対峙する直前の緊張感が欲しい。どの展覧会も特徴がなく、画一的なのである。ある高名な九十歳を越えた現役の役者は今でも出演直前、舞台の袖で身体がふるえると言う。それほどの緊張感が無ければ、きっと真の舞台を楽しむことにはならないのだろう。表現者たるもの全てがそうでなければならないと思う。テンションとリラックスは常に表現者にとっての醍醐味であり、人を魅了する大きな要素である。デザインは客観から入る。アートは主観から入る。デザインは常に社会的であり、その合目的的な行為は論理的な比重が大きい。

それに比べてアートは常に己の衝動に起因するから奥が深く、感覚的である。正しかろうと正しくなかろうととりあえずの図式がこのようなものであったとしても、画家は魅力的な絵を描きたいと常に思い、デザイナーは魅力的なデザインを作り出したいと常に思う。共に魅力的なものを表現したいということに違いは無い。

では、その魅力とは一体全体何なのか。誰がそれを決めるのか。それを見る人であり、それを感じる人である。それは言葉を越えたところに存在する。失礼千万ながら九月中旬、初めて新制作展を見た。土曜日であった。多くの家族連れがゾロゾロと楽しげに歩いていた。私は群衆の中の一人である。しかしあまり浮き浮きした自分ではなかった。身構えている自分が居ただけである。何かを書かなければならないための不純な鑑賞者の自分が居る。そんな気持ちを一瞬たりでも忘れさせてくれるシーンを求めながら歩いた。佐藤忠良の彫刻に触れ、脇田和や風間完の作品に出合い、そして、猪熊弦一郎を思い出しながら歩いた。私がまだ生まれていなかった発足当時に思いを馳せながら当初の新制作展が如何なるものであったのか見てみたいと思った。

まつながしん・グラフィックデザイナー
一九四〇年東京生まれ。一九六四年東京芸術大学美術学部卒業。資生堂宣伝部を経て、七一年、松永真デザイン事務所設立。毎日デザイン賞、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ金賞、芸術選奨文部大臣新人賞など受賞、他著書多数。

受賞作家展

66回展における新作家賞受賞者による受賞作家展（スペースデザイン部は新会員・受賞者）を、左記のとおり開催いたします。開催初日にはオープニングパーティーも行います。皆さまのお出でをお待ちいたします。

絵画部

■会　期　03年1月13日(月)祝日～23日(木)
■会　場　ごらくギャラリー
☎03―3571―3706
■オープニングパーティー
1月13日(月)　午後5時～7時

彫刻部

■会　期　03年2月17日(月)～3月1日(土)
■会　場　ギャラリーせいほう
☎03―3573―2468
■オープニングパーティー
2月17日(月)　午後5時～7時

スペースデザイン部

■会　期　03年2月10日(月)～2月22日(土)
■会　場　画廊るたん
☎03―3541―0522
■オープニングパーティー
2月10日(月)　午後6時～8時

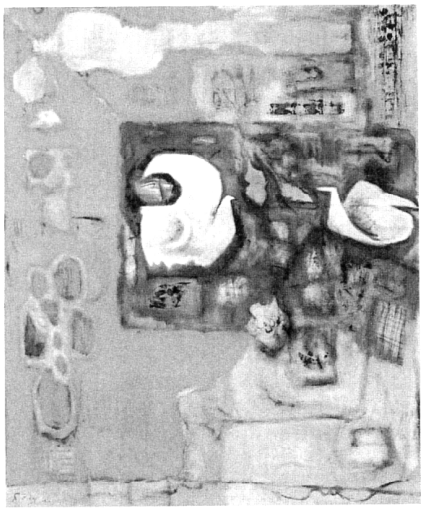
小磯良平回顧展・脇田和展 開催

◇小磯良平回顧展
会期　02年10月5日(土)～12月1日(日)
会場　神戸市立小磯記念美術館

◇脇田和展
会期　02年10月5日(土)～12月1日(日)
会場　世田谷美術館

小磯良平「集い」1977年

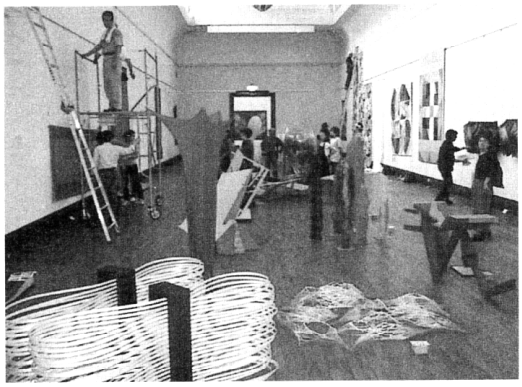
脇田和「暖帯」1985年

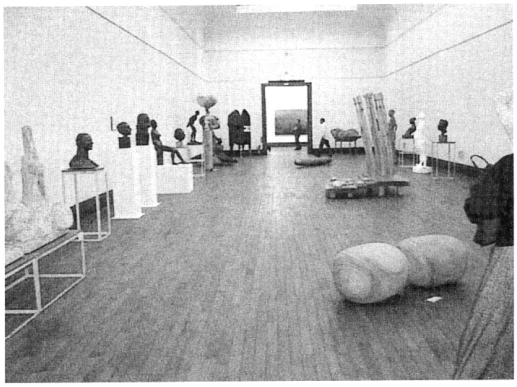


第66回新制作京都展開催（絵画・彫刻・SD）

本年も三部合同による新制作京都展が開催され、盛況でした。
◎会期　02年10月22日(火)～10月30日(水)
◎会場　京都市美術館

写真　上：会場風景
下右：彫刻部陳列作業
下左：ＳＤ部陳列作業





お知らせ

◇巡回展

＊第66回中部新制作絵画展
会期　02年11月19日(火)～11月24日(日)
会場　愛知芸術文化センター8F
　　愛知県美術館ギャラリー

＊第66回新制作絵画広島展
会期　02年11月26日(火)～12月1日(日)
会場　広島県立美術館・県民ギャラリー

◇新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)の概要について

01年10月24日、文化庁より次のような概要についての報告を受けましたので報告しておきます。　(太田國廣)

1 名称「新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)」

2 設置場所　東京都港区六本木7―22―1(東京大学六本木地区移転跡地の一部)

3 事業
(1)展示施設の提供
①全国的な活動を行っている美術団体(組織)が実施する展覧会(公募展等)の利用に供する。
②国立美術館や新聞社等が共同して実施する大型企画展などの利用に供する。
(2)情報の収集、提供
国内外の展覧会の情報を中心に収集し、広く公開する。その際、国公私立美術館との連携協力を図る。

4 敷地約四八〇〇〇㎡　建物約三〇〇〇〇㎡　地下1F地上4F建
完成予定　平成18年

伝言板

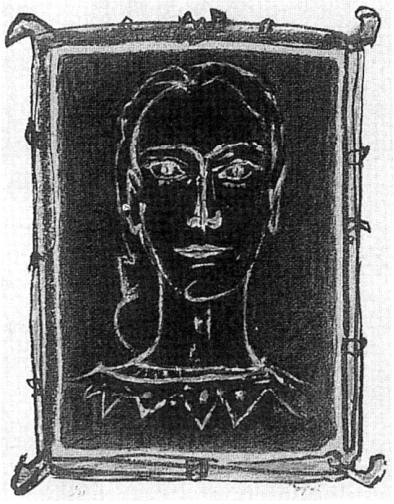
◇絵画部協友推挙

絵画部協友(入選15回以上)二〇〇二年度より左記四名の方が推挙となりましたので報告します。

阿波連永子(滋賀)　河村雅文(京都)
栗田政勝(茨城)　松木義三(東京)

ひとときき

66回展の新作家賞の賞牌は絵画部の荻太郎氏に制作を依頼しました。



“婦人像”
リトグラフ

◇新制作協会eメールアドレス

新制作協会の事務所で受けられるeメールアドレスは以下の通りです。ご利用下さい。「s-seisak@violin.ocn.ne.jp」

訃報

▼西村元三朗氏(絵画部会員)
二〇〇二年七月十一日、逝去されました。享年八十四歳。
心よりご冥福をお祈りいたします。

▼桑田道夫氏(絵画部会員)
二〇〇二年十月一日、逝去されました。享年八十六歳。
心よりご冥福をお祈りいたします。

あとがき

◆それにしても時間の経つのが早い。十才の人の一年は人生の十分の一、六十才の人のそれは六十分の一だから、と。時間切れ「吉國さん、後はお願い……」ではイカンと思いつつ今号もお世話になってしまいました。　(山下)

会報編集委員
(絵画部)　太田國廣・福田徳樹
(彫刻部)　久保制一・森田やすこ
(SD部)　中野　威・山下勘太郎
(吉國写植室)